

ヨーロッパとイスラーム

190781190 小野千春

—本書の目的—

1. イスラーム(ムスリム)と現代ヨーロッパ間の
亀裂原因 及び 両者の衝突拡大の理由解明
2. 衝突回避のための知恵を現実的なレベルで
提示

～トルコからの移民労働者～ inドイツ

1. トルコからの移民流入理由：

WW 2 後の復興にドイツは深刻な労働力不足

→主にトルコ等から労働者移民流入

2003年：トルコ国籍保有者はドイツ全国で

約260万人→彼らの大半がムスリム

2. トルコ系移民が多い地区：クロイツベルク区

特徴：①TVはトルコ放送○ ②ドイツの学校

に登校躊躇→日常生活にドイツ語低下

～トルコ系移民の集住[クロイツベルク区]要因

1. a) 1960年代：安価な集合住宅、古い町工場の集中地区→「外国人労働者」の移民集中
- b) 「家族の再統合」の権利で家族と定住

c) **第一次石油危機で失業者増加のドイツ**



外国人労働者に不満！ → 排外主義へ

ドイツとトルコ系移民の溝

1. 「**ガストアルバイター**」 = 一時的な滞在労働者

→ドイツの永住労働者にも使用→**疎外感 差別感**

2. 「**外国人憎悪**」 = 移民への無数の暴言、暴力

1990年代前半：東西ドイツ統一による経済混乱、
世界各地からの紛争難民の流入

→外国人憎悪一気に加速！

少子高齢化の中で保険料負担

様々な分野で移民勤務



貴重な労働力

ドイツでの移民の立場

1. ドイツ社会との共存条件：日常生活で匂いの強い食材使用不可、日曜日は不労

→ドイツ人とトルコ系移民の考え方に相違

2. トルコ系移民のドイツでの立場：

参政権不可、他の移民と比較し求職の優先度下位

→ドイツがトルコ系移民を社会構築の対等なメンバーと不認定

→ムスリムとしての**宗教的アイデンティティ覚醒**へ

～ムスリムとしての覚醒～

1. ムスリムとしての覚醒要因→①ドイツからの疎外や差別 ②欧州社会現象の家族への悪影響を懸念 →熱心にイスラーム信仰実践開始



～政教分離概念～

1. ドイツのイスラーム議論

- a) 宗教教育へのイスラーム教育の可否
- b) ムスリム女性の公的な場でのスカーフ、
ヴェールの着用禁止

理由：ドイツの「政教分離」、男尊女卑、
人権抑圧

**ドイツは統一体を期待→イスラームに排他的
主張！**

～移民援助の国～

inオランダ

1. ドイツとオランダの比較

- a) 出生がオランダなら、親が外国人でもオランダ国籍取得可能な**出生地主義**
- b) 地方選挙は無国籍で参政可能



ドイツは**血統主義**で国籍取得困難
参政にはドイツ国籍必要

～多文化共生～

1. オランダの多文化社会
 - a) 多数の宗教が共生



オランダの多文化主義

『異なる文化の間に相互理解を想定せず、国家が複数の文化を統合する方策』

『他人に干渉されない権利』 = 『個人の自由』 重視!!

the Netherlands

33,800 km² ^[1]



Kyushu area in Japan

42,231 km² ^[2]



～オランダの社会問題～



1. 学校の分離

「白い学校」：白人ネイティブのオランダ人の学校

「黒い学校」：移民が集中する学校



『**個人の自由意思**』の尊重

ネイティブのオランダ人が子供を移民とは別の学校への通学を選択→**選択は個人の自由 = 差別否定**

～オランダのイスラームの組織化～

1. 宗教の信仰実践の自由

a) **1990年代前半**：ムスリムによるイスラームの学校、高齢者施設等の設立拡大

→ **イスラームの組織化活発**

b) **2001.9.11後**：イスラーム関連施設への暴力事件発生

→ **反イスラーム、反移民感情の高揚**

～オランダでのムスリム覚醒～

1. 1973年：第一次石油危機の発生
 - 欧州諸国が一斉に外国人労働者の募集中止
 - 労働者は母国の家族を招集し共に定住



& 家族への悪影響を懸念



ムスリムの覚醒！



オランダは最大限の自由を保障→イスラム組織の拡大へ

～これから起こるイスラーム規制～

1. オランダのイスラーム規制

a) 9.11後のムスリムに対しての暴力事件増加、
政治家による公でのイスラーム批判

→イスラーム組織の規制強化も時間の問題

理由：イスラームはテロを実施、男女差別

→オランダが不支持：

イスラーム人への個人の自由の保障

～フランス社会の底辺層の移民～

1. フランスの移民集中要因：WW2後の経済復興のため外国から移民労働者を招集
2. フランス国民への条件：
フランス語の十分な理解必須
→移民は低学歴で言語に問題
→低賃金の仕事しか就職不可



フランスの基本理念

1. フランスの基本理念『自由・平等・博愛』

→ フランス国民への条件未達成の移民は
基本理念の適用外

→ フランスでは移民への差別意識否定



実際に差別発生の際、
個人の問題に変換！



～フランスの世俗主義～

1. フランスの世俗主義(国家と教会の分離)

→ムスリムは世俗主義の概念皆無

a) イスラームは無教会

b) 公的な空間でも信仰実践の必要

2. **2003年12月**：公的空間でのイスラーム

シンボル(スカーフ等)の表現禁止の答申

理由：**フランスの世俗主義崩壊を危惧**

～ホスト社会での共同体形成～

1. ホスト社会での共同体形成要因

a) **ドイツ**：元々外国人に対し排斥感情保持
→移民差別に直結

b) **オランダ**：個人(宗教)の自由尊重
→共同体形成の促進システム

c) **フランス**：フランス人同化の圧力を強化し、
ムスリムを宗教から分離へ誘導
→反動でイスラーム共同体の力強化

～世界各国がイスラームを警戒～

1. イスラームのテロ

2004年3月11日：スペインマドリードでムスリムによる鉄道を標的の同時多発テロ発生

→EU諸国はイスラーム組織への監視、規制強化

ムスリムの基本道徳
強者が弱者を救済

中東で苦境の同胞救済のため力で反撃！

～ジハードの増加～

1. 『ジハード』：防衛のための戦い

ジハード増加の要因：

中東・イスラーム世界の戦争、
紛争が現在ネットや衛星放送で
世界中のムスリムに拡散

→同胞の理不尽な死！暴走の使徒出現



—まとめ—

1. テロの抑止には3つの理解

- a) イスラームと敵対の国がムスリムのジハード実施の理由を理解
- b) 欧州が移民のムスリムとしての覚醒要因を理解(ホスト社会での同化圧力と疎外感)
- c) ムスリムが物事の道理を神の定めに戻す概念は欧州社会では拒絶を理解



おわり

